

# 法華義疏を讀みて

稻葉圓成

太子の『法華義疏』は専ら光宅の『法華義記』に據つて書かれたもので、『義疏』には『義記』を本義、本疏、本釋といつて居る。抑々光宅は光宅寺法雲にして、梁三大法師の隨一、殊に法華經の講說に於いて當代に名を得た人であるばかりでなく、その『義記』は後の釋家によつて盛に玩ばれた。天台は『法華玄義』に於いて、「今古の諸釋世に光宅を以て長となす……今先に光宅を難せば餘は風を望む」といつて居る。而してこの『義記』の著作年時は明でないが、光宅は宋泰始三年（西紀四六七）誕生、梁大通三年（西紀五二九）六十三歳示寂の人なれば、その示寂は太子誕生の敏達天皇三年（西紀五七四）を距ること四十五年前である。この『義記』がどうして日本に將來されて太子の手に入つたかは今知るに由なきも、『法王帝說』に上宮王師高麗慧慈法師王命能悟涅槃常住五種佛性之理明開法華三車權實二智之趣一通達維摩不思議解脫之宗且知經部薩婆多兩家之辨亦知三玄五經之旨茲照

天文地之道一即造二法華等經疏三七卷一號曰二上宮御製疏一略下とあるによれば、高麗を経て來たものであらう。それはさて『疏』と『記』とを併せ讀むに、『疏』に叙べたる大義はすべて『記』より得來れるものにして、別に加へたものはない。さはいへ『疏』と『記』とが同じものといふ事ではない。『疏』によつて現はされた法華經と『記』の握んで居る法華經とは其實質に於いて差異がある。『疏』の法華經には現實の裡に滾々として流るゝ生命の香が漲つて居る。『記』の法華經にはそれが缺けて居る。『記』には才氣煥發の光宅師が才氣に任せて巧に紛飾され、絢爛耳目を聳すあでやかな法華である。『疏』は眞劍に道をつき進まんとする太子が唯佛是眞の法華である。『疏』は地上に匂い咲ける花に比すべくば、『記』は床飾りの造花である。『記』が冗漫にして『疏』は簡潔なるも、たゞ外面的な廣略の相違ではなくて、そこに打込まれた作者の魂の弛緩と緊張とを象徴するものである。されば太子は『記』をたよりにて法華經を讀まれたが、決して『記』に囚はることなしに、直ちに法華の眞髓に觸れんとせられたのであつて、こゝにも「和國の教主聖德皇」の面影を偲ばれるのである。如上は私の兩書を讀める直觀であるが、更にこれを數字によつて檢する。『疏』に本義云といつて『記』を引用する所すべて七十八回にして、其の中半は『記』をその儘踏襲されたが、半は『記』に批判を加へて居る。左の如し。

1、「今不須」又は「不記」とするもの十五回

2、「亦好」若くは「隨欲可用」といふもの十回

3、義記の説を擧げながらそれに満足せず「私懷者」といつて自己の考を叙べたるもの九回  
4本義「煩重」なり又は「愚心難」及云々」とするもの五回

(以上數字はすべて櫻部文鏡君の調査に據る)

尤もこの外本義とも本釋とも斷りなしに義記の説を依用したる所甚だ多く枚擧に違あらず。これらの數字によつて『疏』が『記』に専ら據りつゝ而も自主的見解を以て取捨選擇を加へ、單なる祖述の爲の祖述ではないといふ事が知らるゝのである。今試にその一二を例示せん(4)に屬するものゝ中、分別功德品の初の時衆の爲に授記する經文に小千國土の菩薩は八生に阿耨菩提を得、四の四天下の菩薩は四生に得等といへる文に就いて、『記』には詳しく八生四生等を細釋せるが、『疏』に曰く、此文  
中本義微妙細釋而不能受故隨文直唱而已也所謂闕所不審と、痛快な批判の語を挾んである。この意は「入らぬ所に煩瑣な釋をする要はないではないか、それよりは本文を素直に讀めばよい」といふにあるは勿論である。次に安樂行品の四行を『疏』に、惡世に新發意菩薩の此經を弘通する方法を明したもので、四行は一身善行、二口善行、三意善行、四慈悲行なりと釋し、この四行は皆能く危を離れ、安を得、遠く樂果を感じる故に通じて安樂行と稱すといひ、更に然らば萬行は皆勸むべきに何故ぞ唯此の四行のみを勸むるやと問端を發して次の如く言へり。

今此四行前三行卽是自行後一慈悲行卽是外化行、菩薩之道將欲正他先正己身正己之要莫加

三行正他之要慈悲爲本天下萬行雖羅要必在此二行、菩薩若能修此四行上則爲諸佛一所稱嘆中則爲諸天所護念下則爲諸人所供敬下略

かく雄辯に私釋を加へて居られるが、これやがて太子は自ら王者の用心を説いて居られるのであつて、太子自ら法華經弘通の惡世の菩薩として、經を自己の中に取り入れて讀んで居らるゝことは注意すべきことである。然るに此下の『記』の釋亦煩瑣にして四科を開いて一は智慧行二は説法行三は離過行四は慈悲行として、初の二は智慧に攝すべく後二は功德に攝せらるゝと論じ、又初三は自行後一は化他なりと判じ、終りにこの四行を修する人の位は四會處の初より世第一法位に至らざるまでの凡夫位の菩薩なりと全然客觀的態度を以て註釋して居る。而して『疏』の釋がこれによられて而も選擇を加へられたものであるのは、彼此對照せば明なことであるが、『疏』には此は私意本釋少異……亦好隨欲可用と穩に批判を下してある。終に向ほ一例を出さねばならぬ。同安樂行品に菩薩の親近處を説く中に亦不樂與同師常好坐禪在於閑處修攝其心文殊師利是名初親近處とあるを、『記』には不樂與同師の句を經文の上にある年少弟子沙彌小兒を蓄へざれといふ句につけ、常好坐禪は親近すべき處として居る。これは雷に『記』ばかりでなく天台や慈恩等の釋もそれと同じで、經文の當相はいかにもさうである。然るに『疏』には亦不樂與同師の句を下に屬して常好坐禪を小乘禪師のこととして不親近處と釋してある。即ち私意少不安といつて捨此就彼山間常好坐禪然則何暇弘通此

經於三世間。故知常好坐禪。猶應入不親近境。と論じて『記』の説に従ふべからざる旨を明にしてある。こゝにも太子が悪世の導師として世間に卽した佛教を弘通し、人間生活の上に佛教を建設せられんとした態度を見るべきである。常好坐禪それは小乘禪師の閑事である。信仰の生命に燃えたつ大乘の菩薩がなんでそんな夢を貪られやう。何暇弘通此經於世間の句、眞に救世菩薩としての太子の面目の躍如たるを見る。

## 二

法華經は釋尊の魂の開顯である。瞿曇がこれなくしては一日も世間に生きて行く事の出来ない生命そのものをあからさまに開顯したのが法華經である。この生命は成道の一念より釋尊の胸に燃え立つて片時も忘るゝ事の出来ない魂であるからして、四十餘年未顯眞實の間は空しく釋尊の胸の内秘められたのではなく、又秘めらるべきものではない。この魂が人天の大導師としての雄々しい姿を五天竺の隨處に出現せしめた。鹿野苑の説も方等般若の筈もこの魂の躍動の跡に外ならぬ。而もそれが未顯眞實であり方便説であるのは、釋尊の魂が全的に表現されていないからである。それはやがて釋尊が自分自らを全的に打ち出して語るべき知己即ち大機を得なかつたことを意味する。又超世不共の大生命が容易に凡俗の胸に受け入れられぬ難値難見の大法たるが爲である。この大法が

若し釋尊一人によつて占有せらるべきものならば、釋尊は何を苦んでか四十餘年の方便説に心を勞せんや。唯一人大法を懷いて累いなき淨國に到るべきである。然も淨國に到り得ずして地上の汚濁に展轉せざるを得なかつたのは、その大法が唯一人に享有されてはならぬ一切人の常法であるが爲である。大法が瞿曇一人を救ふたといふ事實が一切人の救によつて成就されて居るからして、瞿曇は一切人の上に一人の救を推し擴めなければならなかつたのである。大法それ自らが地上の一切人の上に留まらしめねば措かなかつたのである。超世不共の大法の所有者たる釋尊の使命は濁惡の世、邪見の衆生の上にこの大法を開顯し行いて唯大法の世間たらしむるにある。これが釋尊の魂であり同時に大法そのものゝ生命である。もつと切りつめていはゞそれが大法なのである。即ち釋尊は大法の護持者(人)であると同時に、護持者といふが大法の外にあるのではなく、護持者が護持する我を忘れてたゞ法だけになり切つて行くのであるから、あるものはたゞ法だけである。眞の大法護持といふことは大法だけになり切つた所に完成さるゝのである。又さうした大法だけになり切つた護持者(人)のみによつて大法は存するのであつて、護持する人(指)と護持さるゝ法(月)と別ではないのである。さういふ人によつて指される法は眞實の法でないのである。(このことは勝鬘經に正法即是攝受正法とありて、太子疏には之を釋して萬行正法即是攝受之心なることを明すといひ、次に攝受正法と言ふべきを經文には闕略せるなり、心法一體更無二相といつて人法相即の旨を

明す。可<sub>二</sub>參照<sub>一</sub>これによつて法華經に釋尊の魂を明すのであるからして妙法を説いて居るのである。妙法は釋尊の魂であると同時に一切人の魂である。即ち太子の魂であり、和國の有情の魂でなければならぬ。それを開顯したものが法華經である。―以上叙べ來つた法華經觀は『義疏』が直ちにわれらに語つて居る所である。依つて煩を厭はず『義疏』開卷第一に叙べてある法華經總論の文を引用する。

夫妙法蓮華經者蓋是總取<sub>二</sub>萬善<sub>一</sub>合爲<sub>二</sub>一固之豐田<sub>一</sub>七百近壽轉成<sub>二</sub>長遠之神藥<sub>一</sub>。若論<sub>下</sub>釋迦如來應<sub>二</sub>現此土<sub>一</sub>之大意<sub>上</sub>者將欲<sub>下</sub>宜演<sub>二</sub>此經教<sub>一</sub>修<sub>二</sub>同歸之妙因<sub>一</sub>令<sub>レ</sub>得<sub>二</sub>莫<sub>二</sub>之<sub>一</sub>大果<sub>一</sub>。但衆生宿殖善微神闍根鈍、以下五濁障<sub>二</sub>於大機<sub>一</sub>六弊掩<sub>中</sub>其慧眼<sub>上</sub>卒不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>聞<sub>二</sub>一乘因果之大理<sub>一</sub>所以如來隨<sub>二</sub>時所宜<sub>一</sub>初就<sub>二</sub>鹿苑<sub>一</sub>開<sub>二</sub>三乘之別跡<sub>一</sub>使<sub>レ</sub>感<sub>二</sub>各趣之近果<sub>一</sub>從<sub>レ</sub>此以來雖<sub>下</sub>復平說<sub>二</sub>無相<sub>一</sub>勸<sub>二</sub>同修<sub>一</sub>或明<sub>二</sub>中道<sub>一</sub>而褒貶<sub>上</sub>猶明<sub>二</sub>三因別果相<sub>一</sub>養<sub>二</sub>育物機<sub>一</sub>於<sub>レ</sub>是衆生歷<sub>二</sub>年累<sub>一</sub>月蒙<sub>レ</sub>教漸漸益<sub>レ</sub>解<sub>下</sub>至於<sub>二</sub>王城<sub>一</sub>始發<sub>中</sub>一大乘機<sub>上</sub>稱<sub>二</sub>會如來出世之大意<sub>一</sub>。是以如來即動<sub>二</sub>萬德之嚴軀<sub>一</sub>開<sub>二</sub>真金之抄口<sub>一</sub>廣明<sub>二</sub>萬善同歸之理<sub>一</sub>使<sub>レ</sub>得<sub>二</sub>莫<sub>二</sub>之<sub>一</sub>大品<sub>一</sub>。妙法外國云<sub>二</sub>薩達摩<sub>一</sub>然妙是絕<sub>レ</sub>龜之號、法即此經中所說一因一果之法也。言此經中所說一乘因果之法超然絕<sub>二</sub>於昔日<sub>一</sub>三乘因果之<sub>レ</sub>龜<sub>一</sub>故稱<sub>レ</sub>妙<sub>略</sub>

こゝに法華經に開顯されたる妙法を總括して、萬善同歸の理と莫<sub>二</sub>之<sub>一</sub>の大果即ち一乘因果の法なりといふてある。萬善とは何であるか。人天と二乘と菩薩の善である。一切善惡の凡夫人がそれづく

に潤はさるゝ世間と出世間との道である。『勝鬘經疏』に一切世間安樂快は入乘、一切世間如意自在は天乘、出世間安樂は三乘といふものこれである。一切人をして世間的に安住し、又出世間的に安住せしむるものが萬善である。太子が隋韓の文化を輸入して日本國民の生活を改善せんとしたものすべてが萬善である。しかしそれらの萬善が若し個々のものとして取扱はるゝならばそれは善といはるべきものでなく虚假である。一善でもあり得ないものがどうして萬善の隨一たり得やう。政治がいかに良政であつても、若し單なる政治の爲めの政治であつたならばそれは世間虚假である。外交がいかに巧妙であつても、それだけならばそれは亦世間虚假のたはごとである。又宗教がいかに世に善良な効果を持ち來したとしても、それがたゞ生命に根ざゝない宗教であつたならばそれはやはり亦世間虚假のそらごとである。これらの萬善が萬善として世出世を安樂に潤す爲には、そこに統一原理の生命が漲つて居なくてはならぬ。唯一つの而し一切の上に現はれずには居られぬ生命が一切人の上に流るゝ處にそこに萬善の色とりゝの生彩が現實さるゝのである。既に萬善が唯一の生命の表現であり、唯一生命が萬善を創造する原理なるが故に、萬善は唯一生命に統合されて歸趣せねばならぬ。政治も外交も宗教もすべてが唯一生命の流れに落ちこんでそこに常住の生命を感得しなければならぬ。萬善同歸といふのはそれである。而して唯一生命は即ち一乘である。一乘の妙因である。よつて一乘に出生と會歸の二門があると『勝鬘經疏』には言つて居る。法華經の於一佛乘分別說三



は、生命が萬善を創造する一乗の出生門であるが、大體に於て法華經は萬善がすべて生命に流入する開三顯一の一乗の會歸門である。無明沈沒の無生命の一切人のすべてが生命の門に會入し、すべての差別的階級より解放され一菩薩の同胞として立つ絶對平和の世界が法華經の開顯した妙法の世界である。それはものみなが唯佛の思召のまゝに隨順してそこにはへある生を樂むことの出来る世界である。いはゞ唯佛是眞の境であり、佛智の外に人間の小智が役立たず、妙法の外に一善も一行も許されぬ純一無雜の天地である。私はこゝに亦太子の言によつてこの一乗の世界を味はう。『義疏』は方便品の四一を釋して果一人一因一教一として一乗を説いて居る。果一は佛の智見のみに憑ることである。鹿苑も般若も維摩も法華も其會歸する所は佛智見であり、亦佛智見のみに依つてこれら一代の諸教が開說されたのである。人一は會三昔三人一<sup>二</sup>成<sup>三</sup>今一人<sup>一</sup>。但教化菩薩者言皆是大乘人無<sup>二</sup>別是小乘人<sup>一</sup>也の四海すべて同胞の天地である。次に因一は昔日三善即今一善也……諸善皆爲<sup>二</sup>一因善<sup>一</sup>也の唯一生命を把握する一善にすべての善が把握せらるゝのである。終に教一とは昔三教成<sup>二</sup>今一教<sup>一</sup>也。唯一生命をわれらに惠む教のみが眞實教であつて、すべての教はこの意味に於いて初めて成立する。

### 三

法華經は萬善同歸の妙因を説く、それは釋尊の魂そのものである一乗の開顯であつた。萬善は釋尊を莊嚴する外容であり、一乗はその内容である。萬善と一乗とは別のことではない。法華經の説法を叙して「萬德の嚴軀を動して萬善同歸之理を明す」といひ、又勝鬘經を説ける勝鬘夫人を叙して勝鬘者世以三七寶嚴其肉身而今以萬行嚴其法身故云勝鬘とあるは即ちこれである。されば一乗は一切である。すべてが唯佛のみの世界である。世間虛假唯佛是真はこの法華經の天地である。併し唯佛のみでこれに對立した人間の世界がないといふことは、人間の世界をすべて否定したことであると同時に、人間の世界をすべて攝取し肯定したのである。一乗はこれと對立する何もの法をも認めぬ世界であるが故に、人天三乗のすべてをわがものとして棄つる事が出來ない。法華經の譬喩に長者に配するに窮子を以てする所以はこゝに存する。出世間の天地を語る妙法の開顯に人天三乗の虛假方便を明すこと詳細なるはこれが爲である。窮子が人天の快樂に止まりて火宅を厭ひ捨てんとせざるは虛假であり迷倒である。功利的な除糞の賤業を廢める事が出來ないで、禁欲的な宗教に耽溺するは亦迷倒のそらごとである。併しこれらの迷倒はたとひ虛假でありたは、ごとであるとしても嚴かなる事實である。それは夢幻のやうなはかない事實ではあるが、夢の正に酣なる當人にとつては何者よりも確實さをもつて居るのである。業力の根強さは眞に痛歎すべきことである。先賢が無明緣起を説けるはこれが爲である。併しこれらの迷倒をよそにして高踏することの出來る

は世棄人である。閑人であり仙人であらう。これを虚假と諦めつゝ而も迷はずには居られぬ人世の矛盾を痛感する所に真人の悩みがある。先覺者の慈悲の涙が湧く。一乗はかうした慈悲の涙に濕され悲痛の曲折に褶ひだづけられる。佛はかうした世間虚假の上にのみ己が全相を投げ出すのである。妙法は石のやうな冷めたい原理ではなく、常住は凝り固つた概念ではない。『義疏』譬喩品の下に佛於含靈所在「常爲三化主」といひ、又佛以三三界爲家と釋し、報身雖在三三界而既證三盡智無生二智即成三三界外心「故云門外有三車」也とあり、又佛を世間尊人といひ、法を利益世間尊とし、この佛敎を妄りに宣傳すべからざることを世間尊人所說尊法不宣下以三輕慢爲説と云ひ替へてある。又壽量品の非虚非實を釋して、亦無三聖義是實可取亦無三世事是虚可捨とある。これらはたゞの片鱗隻語を例示したのであるが、『義疏』全篇は世間に即する佛を讚仰し、萬善に即する一乗を嘆ずること  
到れり盡せるのであるが、最後に方便品の是法住法依世間相常住の文の『疏』を引用せん。  
是法住法位者言此萬善法住三乘位也。世間相常住者言世間取相諸善亦常住三乘法位也。  
如上の叙説に於いて世間虚假唯佛是真のたまひし太子が一生を我が國家國民の上に全注したまひし所以を明に讀み得るのである。そして田村皇子に「財物永く保つべからず三寶の法永く傳ふべし」と遺命したまひし太子の面貌を彷彿として窺ひたてまつるのである。

## 四

法華經の前半に示された一乗の妙因に就いて『義疏』に説く所の輪廓だけは杜撰ながらに略ぼ叙べ了つたが、その後半の所説たる一乗の妙果所謂莫二の大果に就いて尙ほ少しく叙べねばならぬ。

前に一乗は釋尊の魂であることを言つたが、その一乗を説く法華經の後半に久遠實成の佛を説いてあることは何を意味するのであるか。いふまでもなく生命の永遠性を顯すものである。既に横に萬善を會歸して萬位を一身の上に攝め盡した一乗は、亦豎に一切時を會歸し、同時に一切時を出生すべきである。短い五十年に繋がる一身といふを止めよ、更に短い一念の時刻の極促に久遠實成の佛を攝め未來遠々の生命を創造するのである。又久遠實成の佛を明に信知し又未來遠々の救濟が成就圓滿するのである。法藏菩薩の物語を神話とするものは、自己の眞生命を與へられぬ者の夢中の譫語に過ぎない。有限の生の上に無限の生命を感得したものは、生の不思議、業力 of 不思議に驚異な眼を注ぐと同時に、そこに久遠の大生命の不可思議に驚嘆せずには居られぬ。無始の無明を痛感すると同時に久遠の智慧に眼が開けるのである。それと同時に、はてしなき生死の苦海に眼ざめた端的に永劫の救たる無量壽國の扉が開かれるのである。法華經の方便品に對して壽量品がなくてはならぬのは、かうした信眼に徹した人でなくては解せられぬことである。よつて涌出品の『疏』の初に今既

明<sub>三</sub>萬善皆是一因<sub>一</sub>即義自應<sub>レ</sub>明<sub>下</sub>以<sub>三</sub>萬善<sub>一</sub>爲<sub>二</sub>一因<sub>一</sub>所得果相<sub>上</sub>所以此明<sub>下</sub>以<sub>三</sub>萬善<sub>一</sub>爲<sub>二</sub>一因<sub>一</sub>而得故佛壽命亦長遠無窮<sub>上</sub>といつて居り、『勝鬘經疏』には入地以上の菩薩は一念の心中に能く一切の願行を圓備する旨を明して居る。依て成道正覺の一念に開顯されたが無量壽の佛である。但し太子疏は七地以還の菩薩は一念に圓備するを得ず漸漸に修得すといひ、又萬善の因に依つて佛果を得ると説いて居る所は、尙ほ通佛敎の斷惑證理の域を全脱する能はざりしか。尙ほ研究すべし。されど橘大郎女が「我大王天壽國に生ずるあらん」といひ、等身の釋迦像銘に往登<sub>三</sub>淨土<sub>一</sub>早昇<sub>三</sub>妙果<sub>一</sub>とある願生思想は確に太子がこの壽量品の長老なる果佛を果てしなき生死の苦海の荒れ狂ふ胸の上に味ひ占められた所に基因するものであらう。そして、親鸞聖人が太子讚に「聖德皇のおあはれみに護持養育たへずして如來二種の回向にすゝめいれしめおはします」と讚仰せられた所以をこゝに偲ばしめられる。

## 五

最後に太子が三經を殊更に選び出し給ひし所以に就いて卑見を附言する。法華經と勝鬘經は共に一乘を説いたものである。その一乘は前來縷述した様に世間に即する一佛乘である。そしてそれが釋尊の出世本懷であり、佛敎の眞髓である。太子は和國の有情をあはれみ日本の國家と國民の改善の基調をこの經典に發見されたのである。一乘は正に釋尊の魂であり、又同時に一切人の魂である。

そこに一切の文化は根ざゝねばならぬ。又一切の改善は成就される。かうした太子の信念は、どうしてもこの二つの經典を選んで弘通せずには居られなかつたのである。次に維摩經は『法華疏』には屢々方便敎にして無相の理を説くとして居られ、又『維摩疏』には抑小揚大爲宗といつてあるが、それを殊更選び出されたは、維摩經は一乗の體達者が世間を虛假と痛感しつゝ然も世間に出でて無體息のはたらきをなせるを説けるものであつて、いはゞ佛が世間に即することを最も具體的に示した一例である。これが維摩經を愛誦された太子の心地であらう。『維摩疏』の開卷第一に維摩詰者乃是已登正覺之大聖也論、本既與眞如冥一談迹即示萬品同量……國家事業爲煩但大悲無息志存益物形同世俗居士云々とある。恐らく維摩居士を太子は理想的人格として憧憬されたのであらう。かの維摩は在家の男子勝鬘は在家の女質の所説なるが故にといふは、一分の理なきにあらざれども、要するに皮相の見であらう。一乗の開顯といふことが選擇意志の眼目と見るべきである。こゝにも親鸞聖人が勝鬘經の一乗章の文を引き來つて、誓願一佛乘なりと開顯された處に、太子との内鑑冷然を見るべきである。そはとまれ、かうした太子に始まつた日本佛敎が常に現實的世間的な色彩を帯んで流れ來つたことは全く太子の賜であつて、その廣大恩徳を謝せねばならぬ。